

水産ニュース

水産技術専門員が伝える村の水産最前線

2017年7-9月号

地撒きホタテ漁

野牛漁協の地撒きホタテ漁を見学しました。桁網を使ってホタテが水揚げされるまでの様子を紹介します。

ウナギ延縄調査

猿ヶ森漁業研究会が大沼、左京沼にてウナギ捕獲調査を行いました。昨年からの樹脂製タグを使った標識放流を実施しています。放流から1年が経ち、標識ウナギは獲れたのか紹介します。

ヒラメ放流

村内沿岸にてヒラメ稚魚が放流されました。稚魚放流の様子と稚魚の生活史を紹介します。

北米海岸の魚

ハイダ族の漁業資源の利用方法は非常に面白く、日本と似通った部分がありました。その代表「K'aaw」とは？そしてどう食べるのか？



地撒きホタテ漁

野牛漁協の地撒きホタテ漁が6月から8月にありました。今年も船に乗せてもらい、今年のホタテ漁の様子を見てきました。平成27年に放流された約6cmのホタテは約11cmまで成長していました。今年のホタテは、アカザラガイの付着が少なく綺麗な貝が多い印象がありました。平成27年に放流したホタテにはアカザラガイがあまり付着していなかったようです。来年はこの区画に稚貝が放流されます。



ウナギ延縄調査、タグ付け

猿ヶ森漁業研究会が、大沼と左京沼にてウナギの採捕調査を行いました。調査前日の夕方にヌマエビを餌にした延縄を仕掛け、翌朝延縄を引き上げました。昨年からの樹脂性のイラストマータグを眼球に埋め込んだウナギを大沼に放流しています。今回は、それら標識の付いたウナギが再捕されるかを確認するものでもありました。大沼では41尾捕獲されましたが、標識個体は再捕されませんでした。左京沼では25尾捕獲されました。小川原湖では標識個体が再捕されているのに、ここ大沼では標識個体が1尾も捕獲されなかった事実、標識個体は放流後に死んでいるのか、それとも、延縄にかかるだけ大きくなっていないのか、謎が深まりました。今後も調査を継続して放流したウナギの放流後の実態を少しでも明らかにできればと思っています。次は、秋から産卵のために降河回遊するウナギの採捕調査がおこなわれます。



ヒラメ放流

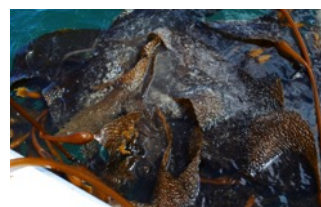
村内の漁港にてヒラメの稚魚が放流されました。ヒラメの稚魚は体長約5cmで、階上町の栽培漁業振興協会にて育成されました。昔は色素が裏側にも沈着したパンダと呼ばれる種苗が存在していましたが、種苗生産技術の改良により今ではパッと見ただけでは分からないほど天然種苗に近い人工種苗が生産されるようになりました。ヒラメは生まれた時は普通の魚のように両側に目があり、水中で生活していますが、成長とともに目が左側に移動します（この体の変化を変態と呼びます）。目が左側に移動すると水中の生活から海底の生活に移行し、アミという小さなエビの仲間を食べて大きくなります。4歳ほどで漁獲できる大きさになります。



コラム『太平洋に浮かぶ離島ハイダグワイの水産物の利用』



この島には昔から北米インディアンのハイダ族が暮らしていて、トーテムポールを代表とする独自の文化が築きあげられてきました。水産物の利用の仕方も面白く、特に子持ち昆布は好物の一つなので紹介します。春になると沿岸の昆布群落に産卵のためにニシンがやってきます。卵がびっしりと産み付けられた昆布“K'aaw”（ガオと発音）



は、ハイダ族の重要な食べ物で、干したり塩漬けにして保存し、干したものは水に戻すかそのまま食べ、塩蔵したものは塩抜きをして食べます。昔は日本にも輸出していたようですが、ニシン資源の減少を受けて、現在はハイダ族しか漁獲できなくなってます。K'aawを代表とする島の水産加工品はかつて本土にカヌーで輸送され、交易品として本土のインディアンの作るシシャモ油と取引されていたようです。今はフェリーで細々と物々交換される程度になってしまいました。